

石勺遺跡J地点

大野城市教育委員会



このシートでは石勺遺跡出土の奈良時代の火葬墓について説明します。

石勺遺跡は大野城市曙町に広がる縄文時代の終わりから鎌倉時代にかけての遺跡です。今回報告するJ地点は福岡県春日原寮の敷地内を指します。ここからは火葬墓の他に溝や柱穴なども見つかりました。

火葬墓とは火葬した人骨を埋葬した墓のことです。火葬が伝わったのは今から約1300年前の飛鳥時代のことです。火葬以前は古墳といった大規模な墓に死者を埋葬していたことを考えると、火葬墓は大変簡単な墓といえます。火葬墓には火葬した骨を容器に納めて埋葬する場合と、火葬した骨を墓穴の中に直接埋める場合があります。この時に使用する容器を蔵骨器とよび、今でいう骨壺と同じ役割を果たしていました。

日本で初めて火葬された人物はお坊さんでした。道照という名前のお坊さんで、文武天皇4年（西暦700年）に火葬されたという記録が残っています。当時、仏教は日本の政治や文化に深く影響をあたえていたため、仏教の風習の一つである火葬も受け入れられたのでしょう。その後、持統天皇以下歴代の天皇が火葬を採用したため、お坊さんや役人まで広く普及しました。一方、庶民は死者をそのまま土に埋める土葬が一般的でした。

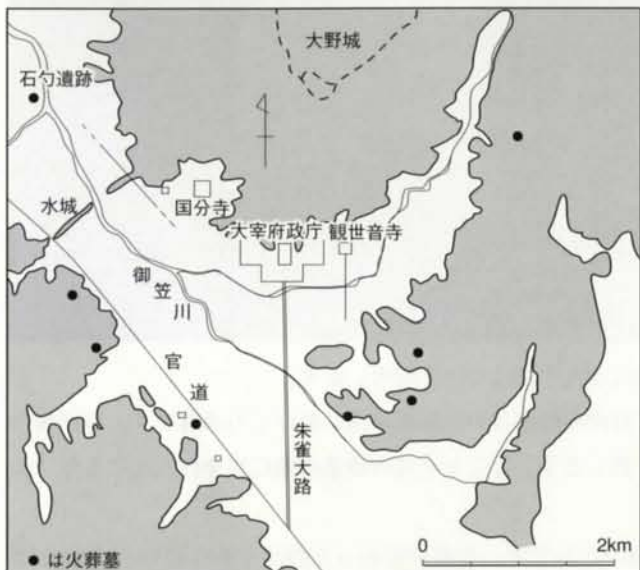
上の写真は石勺遺跡から出土した蔵骨器（須恵器の壺と蓋）と、同時に出土した土師器の蓋です。この中には火葬された骨が入っていました。火葬墓は蔵骨器の形態から奈良時代のものとわかりました。



左の写真は火葬墓の出土状況です。四角に掘った穴の四隅に石を置き、その中央に蔵骨器を置いていました。この火葬墓は四角の墓穴や石の配置などから方位を意識していると考えられます。南西方向の石の上には土師器の蓋がのっていました。

火葬墓にはごくまれに副葬品がともなうこともあります。今回は見つかっていません。副葬品では、蔵骨器の中から鏡の破片や玉類、墓穴からは鉄製品や銅銭（お金）などが知られています。

蔵骨器は須恵器の短頸壺（短い直立した口がつく壺）と蓋（本来はつまみがついていたとおもわれますが、割れていたために残っていませんでした）が使用されていました。壺の底につく高台は打ち欠いてありました。このような例は非常に珍しいといえます。蔵骨器には須恵器や土師器、金属器のものや陶磁器などさまざまなものがあります。その中で、もっとも多いのが須恵器と土師器です。須恵器には今回紹介する専用の蓋を持つものもあります。このよう



奈良時代の火葬墓

な専用の蓋がない場合には、土師器や須恵器の杯や皿などで代用しています。

石勺遺跡周辺の奈良時代の火葬墓をみると、大宰府政庁の周辺では人々が暮らしていた平野部分ではなく、この平野をとりまく丘陵上に火葬墓がつけられていることがわかります。奈良時代に出了された『喪葬令』という、墓をつくるときのきまりがあります。このなかには、都（平城京）の中や公道の近くには墓をつくってはいけないこと、墓をつくることのできる身分や、その身分によって墓の大きさを変えることなどが書かれていました。大宰府政庁周辺でも、このきまりが守られていたといえるでしょう。

石勺遺跡では平坦地から火葬墓が見つかりました。火葬墓の出土状況や蔵骨器の高台を打ち欠くという行為、また土師器の蓋が出土したことなど、大宰府政庁周辺の火葬墓とは異なる様子をしています。一体どのような身分の人物がここに埋められていたのでしょうか。